

「律法と約束」

2020年08月10日

さて、アブラハムとその子孫に対して約束が告げられましたが、その際、多くの人を指して、「子孫たちに」とは言われず、一人の人を指して、あなたの子孫とに」と言われています。この子孫とはキリストのことです。(ガラテヤ3章16節)

パウロは救いは律法によるのか、信仰によるのかを語った後に、神がアブラハムに与えた祝福の約束と、モーセとの間で交わされた律法の違いに関して、「きょうだいたち、人間を例にとって話しましょう」と言って、両者の関係を分かり易く説明している。「人間の契約でさえ」、法的に有効となったら、誰も無効にしたり、それに追加することはできない。新共同訳聖書では「人の作った遺言でさえ」と訳されていたが、聖書協会共同訳は「人間の契約でさえ」と訳している。「遺言」と「契約」は同じ言葉である。法的に有効とされた遺言・契約は、後になって、動かすことができないと言っている訳である。当然のことであるが、パウロはこの例から、律法に先立つ約束・福音の優位性を語っている。

神はアブラハムに現れ、「私はあなたの子孫にこの土地を与える(創世記12:7b)」と約束された。この約束で言われている「子孫」は、「子孫たち」と複数ではなく、一人の人を指さして「あなたの子孫」と単数である。この単数の子孫はキリストである。パウロは、神がアブラハムに約束し、名指しされた「子孫」とはキリストであり、一人の人キリストを通して、祝福が異邦人に及び、またユダヤ人も、霊を信仰によって受ける約束であると語っている。

神は初めに、アブラハムに、あなたの子孫・キリストを通して、祝福を与えると約束された。この相続の約束は厳然と有効である。その430年後、神はモーセを通して、シナイ山で律法を与えられた。モーセの律法が、初めの祝福の約束を無効にすることはない。「神は約束によってアブラハムに相続の恵み、キリストによる祝福をお与えになったのです。」遺言が後になって、動かすことができないのと同じように、キリストによる祝福の約束は変わることなく相続される。パウロは、この法的な約束ごととは動かすことはできないと、律法より約束の絶対的な優位性を語っている。

イスラエルの民は契約を交わし、互いの関係性を保持し、強固な共同体を形成してきた。パウロは、モーセを通して神から与えられた律法を守ることによって、神の祝福に与るという約束を絶対的なものと信じ、律法を遵守するファリサイ派の学徒としてひたすら励んできた。ところが、復活した主イエスと出会い、十字架と復活の福音を知らされた。それは、モーセの数百年前、アブラハムに告げられた祝福の約束である。この約束は律法によるのではなく、信仰による恵みの福音で、パウロの価値観、人生を一変させたのである。

それでは、ユダヤ民族の生活を固く縛ってきた律法は何のためであったのかという問いが起こる。その問いに対し、パウロは、律法はアブラハムに約束した一人の子孫キリストが来られる時まで、違反を明らかにするために付け加えられたものであり、天使たちを通して、仲介者モーセの手を経て制定されたものに過ぎないと言う。後から付け加えられた律法は、神への違反を促し、キリストの祝福の約束・福音に与るまでの救済史的な意味を持つものである。律法は、仲介者モーセを通して制定されたものであるから、神以外のものの意志が働いている。約束は、神お一人が決めて、結ばれたことであるから、律法に勝る絶対的な意味を持っている。この約束は、祝福の約束、すなわち、福音である。